

スポーツ推薦入学者の大学進学行動の特徴に関する検討

長谷川 誠（神戸松蔭女子学院大学）、黒田 真二（中京大学）

本研究の目的は、スポーツ推薦入学者の大学進学行動の特徴について、進学先決定の際に影響を受けた人物や進学した大学を選択した理由に着目し、他の入試区分との比較検討を通して明らかにすることである。分析の結果、スポーツ推薦入学者は、進学先決定の際、他の入試区分よりも部活顧問や先輩の影響を受けており、依然として学びを目的として進学先を選択する意識が低いことが明らかになった。一方で、進学先の選択理由において、学力や偏差値に対する考えや、将来、就きたい仕事に関しては入試区分による差はみられなかった点を指摘している。

キーワード：入試区分別、部活顧問、進学理由、競技成績

1 問題の所在

本研究の目的は、スポーツ推薦入試制度を介して大学へ入学した者（以下、スポーツ推薦入学者）の大学進学行動の特徴について、他の入試区分との比較検討を通して明らかにすることである。

はじめに、大学入試制度におけるスポーツ推薦入試¹⁾の展開過程についてみてみたい。日本の大学のスポーツ推薦入試は、アマチュアスポーツを支える選手制度の一環として、競技者に対する優遇措置と、文部省による推薦入試の公認の動き、各大学の運動部強化の思惑と結びつきながら形成されてきた（小野ほか、2017: 616）。また、「大学運動部」は1970年代に入り「国策」として強化されることになったが、無試験や過剰募集等の入試実施上の問題が残されたまま「進学のための運動部活動」が生まれることとなり、後に高校受験や中学受験にも広がったとの指摘もある（神谷、2015: 115 - 116）。こうした動きには、文部省（1997）「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」が影響している。ここで、大学入学者選抜の改善として「学力試験を偏重する入学者選抜から、選抜方法の多様化や評価尺度の多元化への一層の転換」との考えや、「推薦入学の趣旨を踏まえ、推薦を受け付けながら学力試験を課すことは適当ではない」と言及する等²⁾、推薦入試を積極的に拡大する方針が示された。

このような大学入試の在り方が大きな転換期を迎える中で、かなりの数の大学がスポーツ推薦入試を導入することとなり、実施校数の増大だけでなく、AO入試のような新たな入試方式が生まれたことも後押しして、スポーツ推薦入試の実施形式も、多様化していったと考えられる（小野ほか、2017: 617）。つまり、大学入試におけるスポーツ推薦制度は、国の推薦入試の拡大方針と、大学側の運動部強化の考えが一致したこと

により、大学入試制度において定着することになったのである。

さて、スポーツ推薦入学者の大学進学に関する研究をみると次のような指摘がなされている。栗山(2012)は、スポーツで進学する場合に重要なのは特定の学部や専門分野ではなく、自分の力量に合った部活動でスポーツ活動が継続できる点とする。大東ほか(2015)は、スポーツ推薦入学当事者は成績や勉強に対する自己評価が低く、その低さをスポーツに対する自己評価で補っていることを明らかにした。朝比奈(2017)は、スポーツ推薦入学者が学びに対して興味・関心を示さず、学問に対する姿勢の希薄さについて言及していることや、柿島(2018)も、進路選択における主体性の低さを指摘し、学部選択においても大学卒業後の進路ではなく単位取得が容易かどうかを基準にしていると述べている。このようにスポーツ推薦入学者は、進学後の学びに対する意識は薄く、競技継続の環境を重視していることがみてとれる。

一方、一般的な高校生の大学進学に関する調査をみると、株式会社マイナビ(2021)の調査では、進学した大学を選んだ理由として、最も多かったのが「学びたい内容の授業があるから」となり、次いで「資格を取得するため」「就職活動に有利だと思ったから」と続いた。また、ベネッセ教育総合研究所(2021)は、高校生が受験する大学・学部を決める際に重視する事柄について、「興味のある学問分野があること」が52.1%で最も多く、次いで「入試難易度が自分に合っていること」42.0%、「入試方式が自分に合っていること」34.6%の順になったと報じている。このようにスポーツ推薦入学者と一般的な高校生では大学進学行動において異なる傾向がみられる。

もちろん、スポーツ推薦入学者の進学目的が競技の

継続になることは当然といえる。しかし、さらに注目すべきは、スポーツ推薦入試を介した大学進学をめぐっては、教員の関わりが重要との指摘がなされていることである。栗山（2017）は、強豪校における選手の進路形成の特徴について次のように述べている。1点目は、選手たちは指導者の人脈を経由することで、スポーツ推薦による進学を実現していること。2点目として、こうした指導者の人脈により先に進学した先輩の姿をみることにより、進学先の決定をスムーズにしていることである。つまり、かれらの進路形成は、指導者の人脈や先輩の存在を拠り所としている点の特徴といえる。そして、スポーツ推薦入試は、競技成績の他、主将や裏方としてクラブを支えてきた実績も評価の対象となり、この実績を推薦書に記載するのが顧問教員であることから（西山, 2014）、指導者である教員の影響が大きいことがみてとれる。

このようにスポーツ推薦入学者の進路決定においては部活顧問が重要な関わりを持つ中で、湯川（2013）は、スポーツ推薦入試制度のインフォーマル面の強さに注目し、進学決定の際、部活顧問との関係が密になることで、生徒自身の自律性や主体性による自己決定を行う機会が奪われていると指摘する。また、先述の柿島（2018）の調査では、進学先の大学決定は生徒自身の意志よりも監督の意向が優先される状況が明らかになっている。

他方、高校生が進路選択時に相談する相手についてみると、例えば、山田ほか（2020）の調査によると、保護者が90%で最も多く、次いで友人が84%になったのに対して高校の先生は42%に留まる結果となった。また、株式会社リクルート（2022）の調査でも、進路についての相談相手としては、母親が最も多く、次いで父親となり、担任教員、進路指導教員は両親に比べると少ない結果になる等、全体として高校生の大学進学行動においては両親や家族が与える影響が大きい。

つまり、先述のマイナビ（2021）やベネッセ教育総合研究所（2021）の調査結果が示すように、一般的な高校生の進学先選択理由が学びの内容や、将来の就職の見通しを立てることであるのに対して、スポーツ推薦入学者は学びや就職への関心が低いまま、スポーツ活動を中心とした大学生活を念頭においた進学行動になっており、そこには部活顧問の意向が強く影響していると捉えることができる。

以上のように、先行研究をみると、スポーツ推薦入学者の大学進学行動は一般的な高校生と比べて異なる特徴を持つことや、部活顧問の関わりが強さが特異な

進路行動を形成している要因であることが指摘されてきた。こうした研究はスポーツ推薦入学者へのインタビュー調査等の質的調査を通じて³⁾、進学理由や部活顧問の関わりが強さを示している点で有意義な成果である。しかし、サンプル数が限られており、特定の競技に集中した研究であることや、栗山（2017）の研究ではスポーツ推薦入試以外の入試区分の者を対象にしているものの分析までには至っていない。また、大東ほか（2015）や柿島（2018）の研究は個別大学を対象にした大学別分析による成果であることに鑑みると、複数の大学を対象とし、かつ他の入試区分との比較検討を通じた総合的分析が必要と考える。

さらに、大学進学の原因と入試方式との関係や（西丸, 2019）、入試方式の違いによる学生の特徴（小野塚, 2022）に関する量的調査を通じた研究はなされているが、これらはAO・推薦入試と一般入試の違いによる検討に留まっている。そして、サンプル属性ではスポーツ推薦入試を設定した研究は散見されるが、分析対象から除外されていたり（三保・清水, 2011）、他の入試区分を焦点化していたり（林, 2021）、スポーツ推薦入学者と他の入試区分を比較検討したものは管見の限り少ない⁴⁾。この点からも、スポーツ推薦入学者が大学進学を検討する際に影響を与えた人物や、進学先を選択した理由について、量的調査を基に分析、検討を通じて他の入試区分との差異性や同質性を明らかにすることは必要といえる。

加えて、2021年度からの開始された新たな大学入試制度の個別の入学者選抜においては、多様な評価方法を工夫しつつ「主体性を持って、多様な人々と協働して学ぶ態度」についての評価を重視し、調査書の活用等についての言及があり、部活動等の各種大会記録も対象（文部科学省, 2016: 42）となっている。つまり、今後は、スポーツ推薦入試に限らず高校までの部活動経験が大学進学により一層影響を与えられられる。これは冒頭、1990年代、スポーツ推薦入試が拡大した背景として指摘された文部省が進めた推薦入試の多様化の動きのように、大学入試における評価の在り方が大きく変わることを示すものである。すなわち、これまでスポーツ推薦入試において重要な要素になっていた部活動経験及び競技成績が他の入試区分においても活用されることにより、スポーツ推薦入試と他の入試区分と同質化していくことが考えられ、この点に視点を置いた検討は大学入試研究⁵⁾においても重要だと考える。

これらをふまえて、本研究では、スポーツ推薦入学者の大学進学行動の特徴について、進学先決定の際に

影響を受けた人物や進学した大学を選択した理由に着目し、スポーツ推薦入試と、総合型選抜、学校推薦型選抜や一般選抜等の他の入試区分との比較検討を通して明らかにすることを目的とした。また、今回は高校時代に運動部活動に所属していた者に限定し、分析、検討を行っている。理由は、先述のとおり、大学入試の新制度への移行にともない、部活動経験がスポーツ推薦以外の入試に与える影響が高まる中、部活動経験者に注目することで、入試区分ごとの特徴を整理することができる考えたからである。

2 研究方法

調査は、対象となった大学からの協力を得て、授業内の集合調査による質問紙調査にて、2022年6月から7月に実施した。サンプルサイズは計386名となり、回収率は99.7%（397名中386名）、その内、高校時代、運動部に所属していた353名を対象に分析を進めることとした。内訳は男性237名、女性115名、無回答1名。学年別では、1年22名、2年257名、3年69名、4年5名となった。分野別では、体育・スポーツ系268名、人文社会学系（語学、地域文化、経営）85名。対象にした3大学の所在地は関西地区1校、東海地区2校であり、入試難易度は大手予備校が示す偏差値レベルで中下位に位置している⁶⁾。対象大学の選定理由は、同程度の偏差値帯であることと、異なる学部系統ではあるが、競技レベルは同一水準（全国レベル）の競技団体を有しているからである⁷⁾。そして、出願基準等をみると、いずれも高校時代の競技成績は最低都道府県大会ベスト8以上となっているが、どの大学も一定水準の競技レベルであるため、実際には高校時代に全国大会や地区ブロック大会（関東大会、東海大会、関西大会等）出場実績がある者が対象になっていることは付言しておきたい。また、推薦書に記載される3年生1学期までの評定平均値には差があり、体育・スポーツ系は3年間の評定平均値が2.7に対して、人文社会学系統は3.0以上となっている。募集人員は体育・スポーツ系の募集人員が多く、人文社会学系は若干名となっている。

入試区分⁸⁾については、「総合型選抜：31名」「指定校推薦61名」「学校推薦型選抜：43名」「その他（特別推薦）：10名」を「総合・推薦：145名」、「スポーツ推薦：131名」は「スポーツ推薦：131名」、「一般選抜：65名」「大学入学共通テスト：12名」は「一般・共通：77名」と区分した。また、大学進学後、体育会に所属をしている割合は、「総合・推薦」（所属：87名、無所属：58名）、「一般・共通」（所属：28名、無

所属：49名）となった。質問項目については、表2、表3はいずれも「4:あてはまる」「3:ややあてはまる」「2:あまりあてはまらない」「1:あてはまらない」の4件法で質問している。分析については、統計ソフトIBM SPSS Statistics Ver.25.0を用い、5%を有意水準として、カイ二乗検定、一要因分散分析およびテューキーの多重比較を行った。

なお、本研究で扱う体育会は各調査対象校において強化対象となっている運動部であり、同好会、サークルではないことを付言しておく。そして、調査実施にあたっては、個人が特定されることはないことや、調査の途中でも本人の自由意思で取りやめることが可能なことを伝え、論文への記載についても本人の了承を得た上で行った。

3 結果

はじめに、「入試区分」と「競技成績」のクロス集計結果を分析するためにカイ二乗検定を行なった結果（表1）、有意差が確認された（ $\chi^2=106.582$, $df=4$, $p<.001$ ）。

表1「入試区分」と「競技成績」のクロス集計表

入試区分		全国大会	都道府県 ベスト4以上	都道府県 ベスト8以下	合計
総合・推薦	N	34	25	85	144
	%	23.6%	17.4%	59.0%	100.0%
	調整済み残差	-3.5	-0.2	3.5	
スポーツ推薦	N	80	30	20	130
	%	61.5%	23.1%	15.4%	100.0%
	調整済み残差	8.3	2.0	-9.4	
一般・共通	N	5	7	62	74
	%	6.8%	9.5%	83.8%	100.0%
	調整済み残差	-5.6	-2.1	6.9	
合計	N	119	62	167	348
	%	34.2%	17.8%	48.0%	100.0%

($\chi^2 = 106.582$, $df = 4$, $p < .001$)

「総合・推薦」「一般・共通」は「都道府県ベスト8以下」の割合が多く、「スポーツ推薦」は「全国大会」「都道府県ベスト4以上」が多かった。

次に、進学時に影響を受けた人物について入試区分別の一要因分散分析を行った（表2）。その結果、「③部活顧問の先生」（ $F(2,345)=63.85$ $p<.001$ ）、「⑥先輩」（ $F(2,342)=18.56$ $p<.001$ ）をみると有意差が認められ、いずれも「スポーツ推薦」は「総合・推薦」「一般・共通」より有意に高く、「総合・推薦」は「一般・共通」より有意に高い結果となった。続いて、進学先の大学を選択した理由について入試区分別の一要因分散分析を行った（表3）。結果は「③専門的な研究、学習がしたいから」（ $F(2,350)=9.46$ $p<.001$ ）は「総合・推

表2 進学時に影響を受けた人物に関する一要因分散分析

質問項目	入試区分	平均値	標準偏差	F 値	有意確率	多重比較
① 担任の先生	1 総合・推薦	2.28	1.14	0.62	n.s.	
	2 スポーツ推薦	2.14	1.16			
	3 一般・共通	2.26	1.09			
② 進路指導の先生	1 総合・推薦	1.78	0.89	1.38	n.s.	
	2 スポーツ推薦	1.70	0.90			
	3 一般・共通	1.58	0.80			
③ 部活顧問の先生	1 総合・推薦	2.52	1.21	63.85	***	2>1>3
	2 スポーツ推薦	3.50	0.83			
	3 一般・共通	1.83	1.10			
④ 家族	1 総合・推薦	2.64	1.11	0.37	n.s.	
	2 スポーツ推薦	2.74	1.11			
	3 一般・共通	2.62	1.06			
⑤ 友人	1 総合・推薦	1.87	0.96	1.14	n.s.	
	2 スポーツ推薦	2.06	1.05			
	3 一般・共通	1.97	1.11			
⑥ 先輩	1 総合・推薦	2.00	1.04	18.56	***	2>1>3
	2 スポーツ推薦	2.55	1.18			
	3 一般・共通	1.63	0.96			

***p<.001

表3 進学先の大学を選んだ理由に関する一要因分散分析

質問項目	入試区分	平均値	標準偏差	F 値	有意確率	多重比較
① 学力レベル, 偏差値などが自分に合っていたから	1 総合・推薦	2.80	1.02	1.40	n.s.	
	2 スポーツ推薦	2.64	0.99			
	3 一般・共通	2.86	0.97			
② 将来, 就きたい仕事が決まっていたから	1 総合・推薦	2.93	1.07	1.74	n.s.	
	2 スポーツ推薦	2.70	1.09			
	3 一般・共通	2.74	1.04			
③ 専門的な研究, 学習がしたいから	1 総合・推薦	3.06	0.97	9.46	***	1・3>2
	2 スポーツ推薦	2.56	1.09			
	3 一般・共通	2.99	0.85			
④ 資格や免許を取得したいから	1 総合・推薦	3.38	0.87	4.11	*	1>3
	2 スポーツ推薦	3.15	1.06			
	3 一般・共通	3.01	0.92			
⑤ 希望する部活動, サークルがあったから	1 総合・推薦	2.48	1.21	109.53	***	2>1>3
	2 スポーツ推薦	3.74	0.60			
	3 一般・共通	1.78	1.01			
⑥ すぐに社会に出るのが不安だったから	1 総合・推薦	2.28	1.13	4.79	**	3>2
	2 スポーツ推薦	2.13	1.09			
	3 一般・共通	2.61	1.11			

***p<.001 **p<.01 *p<.05

薦」「一般・共通」が「スポーツ推薦」よりも有意に高く、「④資格や免許を取得したいから」(F(2,350)=4.11 p<.05)については「総合・推薦」が「一般・共通」より有意に高かった。また「⑤希望する部活動, サークルがあったから」(F(2,350)=109.53 p<.001)

は「スポーツ推薦」が「総合・推薦」, 「一般・共通」より有意に高く「総合・推薦」は「一般・共通」より有意に高い結果となった。そして「⑥すぐに社会に出るのが不安だったから」(F(2,350)=4.79 p<.01.)は「一般・共通」が「スポーツ推薦」よりも有意に高かった。

以上が分析結果である。

4 考察と課題

本調査の結果からみえるスポーツ推薦入学者の大学進学行動を、他の入学者（総合・推薦、一般・共通）と比較した場合、その特徴として、次の点をあげることができる。

1点目（表1から）は、スポーツ推薦入学者は高校時代に成し遂げた競技成績において、全国大会出場レベルが圧倒的に多く、続いて都道府県ベスト4以上でも他の入学者を凌駕していることである。この背景には調査対象のいずれの大学も推薦基準において一定の競技成績を求めていることがある。

2点目（表2から）は、進学の際に影響を受けた人物では、他の入試区分よりも部活顧問や先輩の影響を受けていたことである。この点は、栗山（2017）や西山（2014）の指摘と符合するものである。

3点目（表3から）は、進学先の大学を選んだ理由をみると、他の入試区分よりも希望する部活動、サークルをあげており、専門的な研究や学習等、学びに対する意識は低かったことである。他の入試区分よりも学びの内容に対する意識が低い結果となったのは、先行研究と同様の傾向を示すこととなり、かれらはスポーツ活動を中心とした学生生活を念頭においた進学行動をとっていることが再確認できた。一方で、学力や偏差値についてや、将来、就きたい仕事に関しては入試区分による差はみられなかった。

このように、スポーツ推薦入学者の大学進学行動の特徴としては、依然として、他の入試区分と比べて部活顧問や先輩の影響を受ける傾向があり、進学の目的も部活動の継続が最も強く、学びへの関心は低い状況になる等、差異性が認められた。今回、これらの点について量的調査を通じて示せたことは、これまで質的調査で示されてきた指摘を補強するものである。さらに学力や偏差値、将来の就職に対する意識について同質性が確認できたことは知見のひとつである。

そして、「総合・推薦」に注目してみると、スポーツ推薦入学者ほど強くはないものの、部活顧問や先輩の影響を受けていたり、進学先の大学を選択した理由をみても希望する部活動、サークルをあげていたりスポーツ推薦入学者との同質性が確認できた。この点については小野ほか（2017）が指摘したようにAO入試（現行では総合型選抜）がスポーツ推薦入試の多様化を促した側面があることを考慮すれば、両者を区分することが難しいことや、スポーツ推薦入試の募集人員において体育系、スポーツ系が多く、人文社会学

系が少ないことは付言しておく必要がある。

その上で、今回は「総合・推薦」145名のうち総合型選抜は31名と2割程度に留まっており、6割（145名中87名）の学生が大学進学後も体育会に所属し、スポーツ活動を継続している。また、「総合・推薦」は高い競技成績をおさめている割合は小さく、これは先述したとおり、調査対象となった大学は高校時代に一定水準以上の競技成績を収める必要があるためといえる。したがって大学入学後にスポーツ活動を継続したいと考える者のうち、スポーツ推薦入試の基準を満たす競技成績を有していない者は、スポーツ推薦入学者と同様に、部活顧問や先輩の影響を受けながら総合型選抜のみならず、部活動経験を活かして指定校推薦や学校推薦型選抜を通じて進路実現を果たしていると考えられる。

また、冒頭に指摘したように、2021年度から開始された新たな大学入試制度では、高校時代の活動実績も評価対象となり、その中で主体的、協働的な態度も重要な指標となった。ベネッセ教育総合研究所（2018）の調査でも、部活動が主体性や協働性の育成に寄与していることが明らかになっていることをふまえれば、部活動が新たな大学入試制度において親和的な要素を持っていると指摘することができる。すなわち、本研究の結果は、今後、部活動経験はスポーツ推薦入試のみならず、高校時代の活動経歴や面接を評価対象とする総合型選抜や学校推薦型選抜においても重要な意味を持つことを示唆するものであり、大学側としても入試の際、主体的、協働的に学ぶ態度を持つ人材を確保できる点で部活動経験者の獲得は有意義といえる。

但し、懸念もある。このような傾向は、今回、部活動経験者に限定した調査であるものの、部活動経験が生徒の進路実現の可能性を高めると同時に、スポーツ推薦入試以外の区分においても部活顧問の影響範囲が広がる可能性を示すものである。それは湯川（2013）が指摘するスポーツ推薦入試のインフォーマルな部分も含意しながら、大学入試制度、とくに総合型選抜や指定校推薦、学校推薦型選抜内に浸透する側面を持つことを予見させる。これらは大学入試研究の視点からみても重要な分析視角になるといえよう。

以上のような成果が得られた一方で課題もある。今回、複数の大学を対象としているとはいえ、サンプル数は少ない。運動部活動経験の有無が進路成熟度に影響及ぼすとの指摘（上野、2014）もあり、今後は高校時代に運動部活動に所属していなかった者のサンプルを増やした上で、さらに詳細に分析、検討をする必要がある。また、学部系統の違いからの検討も重要であ

ろう。例えば栗山（2021）の研究では、スポーツ推薦入試を実施している学部系統として社会科学系学部が最も多く、次いで体育・スポーツであることが示されている。加えて、スポーツ推薦入試という制度と、大学入学後の学修内容が必ずしも一致しているわけではないと指摘している。つまり、学びに対する意識の低さ等の課題は学部系統によって異なる可能性があると考えられる。

そして、今後は、他地域でも同様の調査データを収集することによって、本研究で得た結論の補強を行い、最終的に国内すべての地域のデータを収集する。それにより、本研究の仮説を検証するための「量的調査」を完遂して、本研究の結論を一般化することに努めた。

注

- 1) 「スポーツ推薦入試」の定義について伊藤（2019）は「スポーツ推薦入試とは、推薦入試制度の一種であり、主に大学入学においては、高校時の競技成績を評価して選抜する入試方法である」と述べている。本研究におけるスポーツ推薦入試は、これに加えて、出願条件に「競技成績」基準があり、かつ、大学入学後、当該競技種目のスポーツ活動を継続することを前提とした入試方法とする。
- 2) なお、本研究で示す「学力」は、一般選抜においてペーパー試験で測定される学力とし、いわゆる「知識偏重型」に準ずる使用とする。また、表3の質問項目「①学力レベル、偏差値レベルが自分に合っていたから」の「学力」もこれと同義として扱う。
- 3) 本研究における量的調査、質的調査については次のように定める（安藤, 2021: 27）。「量的調査」は対象となる多数の人に調査票などを定型的に行い、結果のデータが主に数量的に得られるものとする。「質的調査」は、対象となる少数の人に対する面接調査や参与観察、ドキュメント分析など非定型的に行い、結果のデータが主に文章の形で得られるものとする。
- 4) 他にも、高校時代の部活動経験が大学進学行動に与える影響に関する研究もあるが（白松, 1997; 上野, 2014; 辺土名, 2019）、これらは入試難易度や高校の学科属性に注目した高校間や高校時代の部活動所属の有無からの分析であったり、同一高校でも大学と専門学校や就職といった他の進路分化に視点を置いたものであったりと、推薦入試や一般入試との比較に注目したものではない。
- 5) 「大学入試研究」については、まず「大学入試」を「令和6年度大学入学者選抜実施要項について（通知）」（文部科学省, 2023）の基本方針に記述されている「各大学は、入学者の選抜を行うに当たり、公正かつ妥当な方法によって、

入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定する」取り組みとした上で、これに係る事柄を対象とした分析、検討とする。

- 6) 河合塾 2023 年度入試難易度ランキングにおいて、いずれの大学も偏差値 45 以下の位置にある。河合塾の偏差値については他社よりも低くなる傾向があることを考慮し、中下位と位置付けることとした（河合塾, 2022）。
- 7) 本研究はスポーツ推薦入学者と他の入試区分との比較検討を通じた総合的分析を目的としていることから、対象大学の属性の影響をできるだけ小さくするために入試偏差値帯、競技レベルを同一水準とした。但し、学部系統の影響を排除できないことは留意する必要がある、この点は次回課題としたい。
- 8) 本調査においては、旧入試制度名も併記した上で実施し、本文中には新入試制度の名称を使用している。

参考文献

- 安藤明之（2021）. 『初めてでもできる 社会調査・アンケート調査とデータ解析』日本評論社.
- 朝比奈なを（2017）. 「部活動ばかりする「名ばかり大学生」の実態」『東洋経済 ONLINE』. <https://toyokeizai.net/articles/-/198897?page=3>（2023年3月20日）.
- ベネッセ教育総合研究所（2018）. 「第1回部活動の役割を考える 子どもたちに適切な活動の機会を提供するためにその2」. https://berd.benesse.jp/special/datachild/comment01_2.php（2023年3月30日）.
- ベネッセ教育総合研究所（2021）. 「第4回 大学生の学習・生活実態調査報告書 データ集（Part01:高校から大学入学まで）」. https://berd.benesse.jp/up_images/research/4_daigaku_chousa_p6-l2.pdf（2023年11月20日）.
- 林直也（2021）. 「体育会に所属する大学生の大学への帰属意識に関する研究—コロナ禍における体育会の意義について考える—」『人間福祉学研究』14（1）、91 - 103.
- 辺土名齊朝（2019）. 「運動部活動に参加する生徒の進学状況：A 高校ラグビー部の進路指導実践」『名桜大学総合研究』28, 163 - 169.
- 伊藤明己（2019）. 「スポーツ推薦入試と部活動」青柳健隆 岡部祐介, 『部活動の論点「これから」を考えるヒント』旬報社, 99.
- 株式会社マイナビ（2021）. 「高校生の進路意識と進路選択に関するアンケート調査」<https://souken.shingaku.mynavi.jp/research/followup2021/>（2023年3月19日）.
- 株式会社リクルート（2022）. 「保護者は子どもを知ってる」『リクルートカレッジマネジメント』232, 47.
- 柿島新太郎（2018）. 「学生アスリートの学修支援に関する一

- 考察』『中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究』3 (2), 145 - 149.
- 神谷拓 (2015). 『運動部活動の教育学入門—歴史とダイアログ』大修館書店.
- 河合塾 (2022). 「入試難易予想ランキング」<https://www.keinet.ne.jp/university/ranking/> (2023年3月13日).
- 栗山靖弘 (2012). 「スポーツ特待生の進路形成」『社会学ジャーナル』37, 167 - 183.
- 栗山靖弘 (2017). 「強豪校野球部員のスポーツ入試による進学先決定のメカニズム：部活を通じた進路形成と強豪校の存立基盤」『スポーツ社会学研究』25 (1), 65 - 80.
- 栗山靖弘 (2021). 「スポーツ推薦入試と高大接続—進学先の特徴とマッチングをめぐる—」『体育の科学』71 (2), 83 - 87.
- 三保紀裕・清水和秋 (2011). 「大学進学理由と大学での学習観の測定—尺度の構成を中心として—」『キャリア教育研究』29, 43 - 55.
- 文部省 (1997). 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方にちいて (中央教育審議会二次答申 (全文))」https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/970606.htm (2023年3月11日).
- 文部科学省 (2016). 「高大接続システム改革会議「最終報告」」https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin_icsFiles/afeldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf (2023年3月12日).
- 文部科学省 (2023). 「令和6年度大学入学者選抜実施要項について (通知)」https://www.mext.go.jp/content/20230719-mxt_daigakuc02-000005144_10.pdf (2023年11月29日).
- 西丸良一 (2019). 「大学への進学理由と入試形態の関係—大学入試研究の経緯を踏まえて—」『明星大学社会学研究紀要』39, 39 - 47.
- 西山哲郎 (2014). 「体罰容認論を支えるものを日本の身体教育文化から考える」『スポーツ社会学研究』22 (1), 58.
- 小野雄大・友添秀則・根本想 (2017). 「わが国における大学のスポーツ推薦入学試験制度の形成過程に関する研究」『体育学研究』62, 599 - 620.
- 小野塚祐紀 (2022). 「大学入試方法による学生の違い—出身高校ランクによる異質性—」『日本労働研究雑誌』742, 91 - 103.
- 大東貢生・平田毅・新矢昌昭・湯川宗紀・富川拓・全炳昊・長光太志・山幸代 (2015). 「スポーツ推薦入学当事者が「勉強ができない」と語る意味：高等教育機関における課外活動の研究 (10)」『佛大社会学』39, 29 - 34.
- 白松賢 (1997). 「高等学校における部活動の効果に関する研究」『日本教育経営学会紀要』39, 74 - 89.
- 上野耕平 (2014). 「ライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響」『スポーツ教育学研究』34 (1), 13 - 22.
- 山田恭子・盛山泰秀・鹿内健志・廣瀬等 (2020). 「高校生が進路選択時に相談する相手—アンケート結果に基づいた保護者向け説明会の実施—」『大学入試研究ジャーナル』30, 154 - 159.
- 湯川宗紀 (2013). 「スポーツ推薦入学当事者の進路決定における主体性・意思決定—高等教育機関における課外活動の研究VI—」『関西教育学会年報』37, 176 - 180.